

首の詠進をした。家集に加へられてゐるものは、その中の六、七首にすぎないけれど、以て、ほぼ當時の詠み振を察することが出来る」と暗に七首以上、相当数の歌を奉ったように受けとられる発言をされている。

が、私は「草庵集」に撰歌された、この七首がそのすべてであつたと推測している。千首歌といつても、なにも一人で千首を詠出するのではなく、「建武千首」の場合は、千首題を身分や力量その他を配慮して、探題方法で各人に歌題を配分する形式である。現在、資料面に知られる範囲だけでも、三十名以上の歌人が参加しているが、他に資料面に表われぬ歌人を勘定に入れると、一番多い歌人でもせいぜい三十〜四十首程度ではなかつたらうか。いくら力量を認められていても、頼阿は地下の法体歌人である。七首の下賜というのはそのあたりを勘案すると相應の歌数のように思える。この私見を裏付けるものとして、兼好も「家集」に七首、しかも「建武二年、内裏にて千首歌講せられしに、題をたまはりてよみてたてまつりし七首」と一括して掲載しているのである。この詞書の記し方は、奉った歌が七首であつたことを感じさせる。以上からみて、井上氏の「兼好は家集によると七首を進めているが、地下は各々その程度の歌数を詠じたのであろう」という考えを支持したい。

八十四年間の生涯をおくつた頼阿にとつて四十七歳という壮年時、内裏より下賜された「建武千首」歌は名譽ある出来事として忘れられない思い出であり、それだけ、この資料への愛着も深かつたらう。その気持が「草庵集」に七首全部採歌という結果になつてあらわれたとみたい。歌の内容も、

ことの葉のさかゆる御代に夏草のふかくもいかて道をたつねん(三四四)
時にあふわかこのうらわの友ちとりおもひなきにもねこそなかるれ(七五〇)

と、ひたすら建武の中興による歌界復興の機運を歡喜し、また、桜さくいつくはあれと春ことにたつねてそ入みよしの山(一四六)

秋かせの日ごとに吹はさほしかのつま待わひぬたくれもなし(二六七)

と、晴歌にふさわしい、平穩な内容とたけ高き調べの歌を奉つている。

おわりに

これまで「花十首寄書」と「建武二年内裏千首」の両歌会の成立背景と、それと「草庵集」との撰歌状況とに探りを入れてきた。

「花十首」は頼阿二十七歳の若年時、二条派の錚々たる歌人とともに参加した歌会で、彼にとつても忘れがたい出来事であつたためか、さし替え歌の可能性を勘定に入れると十首すべてを採歌している。

一方、「建武千首」は作者四十七歳の壮年時の歌会だが、これも、内裏から歌題を下賜されるという名譽ある勅命だつたために、愛着も深く、七首全部を採歌したとみてよい。

このようにみると、両歌会資料は、頼阿にとつて生涯の歌壇活動の中で、若年時、壮年時における忘れがたい歌会のものであつたがゆゑに、全歌採歌という結果になつたようである。

先稿の「聖護院五十首」の調査でも明らかにしたところだが、頼阿は「草庵集」を編纂するとき、比較的手薄な若年時の資料で、手元に原資料のあつたもの、しかもそれが記念すべき歌会資料であつたときには、歌のよしあしを二義的に考え、できるだけ多く採歌しようとしたこと、それは同時に「草庵集」を若年時から晩年にいたるまでの広範囲な年代にわたる生涯の歌歴を示す歌集にしようとした編纂方針の一端を暗示している。

注1 拙稿「草庵集」の撰歌資料考(一)——「聖護院五十首」——(岡山大学教育学部研究集録第五十一号)。

注2 5・7・14・16 「頼阿法師の一生」(「南北朝時代文学新史」所収)。

注3 6・8・15 「頼阿・慶運」。

注4 11・12・13・17 「中世歌壇史の研究(南北朝期)」。

(昭和54年7月16日受理)

他にも多い。

以上のように「建武千首」は、建武中興を祝すべく、後醍醐天皇が為定に出題を命じ、おそらく、建武二年八月以降に内裏で探題形式で詠出せしめたもので、その作者の範囲は、公家、武家、法体歌人など、現在知られるだけでも三十名以上の、二条派の精鋭をえりすぐった広範囲なものであったこと、そして、おそらく、二度にわたり召された可能性があり、最初は「堀川百首」題を中心にした千首題、二度目は「春天象」系の歌題で、この時は、内裏での探題歌会にとどまらず、広く地下層にも歌を下賜して詠出せしめたもので、両度は、さして日をおかず開催され、ともに「建武二年内裏千首」として一対のものとしてきたこと、などを推測してきた。

四、「建武二年内裏千首」と「草庵集」

建武期は先の「花十首寄書」の正和期とは逆に、大覚寺、二条派の復活期であり、この「建武千首」も二条派系統の歌人を集合させた派閥色の濃い歌会であった。

建武二年といえ、頼阿は四十七歳、すでに、兼好・浄弁らの法体歌人とともに、天皇から歌題を下賜される二条派の地下歌人として、歌壇に台頭していた。

頼阿は「建武千首」で幾首詠出したのであろうか。
まず「頼阿法師詠」には次の五首が採歌されている。

建武二年内裏千首に 春天象

あざほらけかすみへたて、たこの浦にうちいて、みれば山の葉もなし(山堀ト) (四)

建武二年内裏千首に 春地儀

さくらさくいつくはあれと春ことにたつねてそ入みよしの山(ナシト) (三九)

建武二年内裏千首に 夏植物

ことの葉のさかゆる御代に夏草のふかくもいかてみちをたつねん(ト) (八九)

建武二年内裏千首に 冬動物

時にあふわかのおらはのともちとりおもひなきにもねこそなかるれ (二二〇)

建武二年内裏千首に 恋雑物

くちのこるあしまのを舟いつまでかさはるにかこつ契なりけん(るト) (二九二)

最後の歌は「新千載集」に、

建武二年内裏にて人々題を探りて千首の歌詠みける時、

恋雑物と云へる題を給はりてつかうまつりける 頼阿法師

朽ち残る葦間の小舟いつまでか障るに唧つ契なりけむ (二六二)

として撰入している。この詞書により、題を下賜されたことがわかる。

一方「草庵集」には「頼阿法師詠」の先掲五首は、同じ詞書のもとで四↓四七(春上)三九↓一四六(春下)八九↓三四四(夏)二一〇↓七五〇(冬)二九二↓一〇六二(恋下)にすべて収録されている。しかも両集の間には本文異同もないので、「頼阿法師詠」から「草庵集」への編纂過程での本文改訂はなかったとみてよい。

加えて「草庵集」にはこの五首の他に、次の二首がみえる。

建武二年内裏千首、秋天象

待いてぬふもとの里もなかりけりおのへの月やすみのほるらん (秋上・五一八)

建武二年内裏千首歌に、秋動物

秋かせの日ことに吹はさほしかのつま待わひぬたくれもなし (雑・二二六七)

従って「草庵集」には七首の「建武千首」歌が、各歌題の性格にそって七箇所配置されていることになる。一一六七番は「秋動物」なのに雑部に配列したのは、この次の歌も、

つまこひの心しられてをくら山夜こそまされさほしかの声

であるごとく、この前後、雑秋の内容と判断しての処理であろう。

先の問いを繰り返すことになるが、頼阿は、実際に「建武千首」で幾首の歌を奉ったのであろうか。斎藤氏は「兼好、浄弁等と共に頼阿も千

で、一首ごとちがった千首題の出題ではなかったと思う。それは現存範圍でも、例えば「花」とか「月」など幾人もの歌人が同一題で詠じていることでも納得できる。

ところで「建武千首」の成立時期であるが、先述したように、井上氏は足利尊氏の動向からみて、八月以降に行われたと推測されているが、完成に関して斎藤清衛氏は「完成したのはやはり翌三年であつたらしい」とされいている。斎藤氏は何を根拠にこのように推測されたのであろうか。確かに、「草庵集」の「建武千首」の歌の詞書には、四七番や一四六番に「建武三年」とする諸本も一部あるが、これはやはり、他の多くの諸本のごとく、「二年」とすべきであらう。

建武二年という年は、石田氏の言をかりれば、「真夏のやうにはげしく明るい建武中興の世となつた。そして歌界も復興の機運すさまじく、中殿御會をはじめ、七夕、中秋、重陽等の歌會がひまなく宮中で行はれた状況にあつた。「建武千首」は、かかる内裏を背景にかんがみて、後醍醐帝が自からの御高志を示すべく、為定に出題を命じ、二条派系列の力量ある作者を内裏に招き、探題形式で開催されたものと思える。この探題歌會に参加したのは、おそらく一般題の歌を詠出している歌人で、地下層の参加はなかつたらう（もっとも、現存資料内では、為世・為明などは「春象」系の歌しか残っていないが、内裏にも参加し、一般題も詠じていたらう）。

その際「増補和歌明題部類」のいう「第二度」をどう解するかが改め問題となる。建武二年の別の月日に二度行われたというのか、同じ日に、二つの系列の歌題を詠ませたのか。ただ、あまりに性格の異なる二系列の歌題のあることを思うと、「明題部類」の「第二度」の指摘は等閑視できない。

あくまで臆測の域を出ないが、後醍醐天皇は、建武二年八月以降まもなく、内裏での探題形式による千首歌會を計画し、為定に出題を命じた。為定は「堀川百首」を中核にした歌題で千首題を提出、人々がそれにそ

って内裏で詠じた。このとき、尊氏などのように題を下賜された人物も一部いたらう。

さらに天皇は、それからあまり日をおかずして、今度は公家だけでなく、広く武士、地下にも題を下賜する千首歌を計画し、「春象」系の歌題を三十題ばかり用意させ、公家たちは内裏で探題形式で詠出させ、残りのものは、頼阿や兼好などの地下歌人に下賜して詠進せしめた。そして「建武千首」の歌人には二回の歌會に関係したものと、そのどちらか一方だけに関係した歌人があつたと推測してみた。

このように「建武千首」は二度あつた可能性が強いこと、しかもそれは決して別個の千首ではなく、あくまで一対、一連のものとして、月日を隔てずして行われたとみたい。しかも、勅撰集の撰集準備としての百首歌などのように詠出期間のかかるものではなく、内裏での探題歌だから、一日のうち、下賜された歌人も歌数も多くないので、まもなく提出できたろう。その点、建武二年内で完成したとみてよく、斎藤氏のやうに三年完成とみない。

「建武千首」の企画の目的の一つは、天皇の政治が回復したことを天下に誇示し、その革新的な御代を寿ぐことにあつたらうことは、詠出した各歌人たちの次のような歌からも容易に察せられる。

さぞなげにはな立花も匂ふらむむかしにかへる百敷の庭

(公秀・新千載・二五二)

天の原岩戸をあけし神代よりいまも絶えぬ糸竹のこゑ

(盛徳・新千載・九四七)

君が代の千とせの数をよばふなり雲居に高き鶴のもろ聲

(道熙法親王・新千載・二二八二)

せり川のちよのふるみちすなほなるむかし、の跡はいまや、みゆらん

(兼好法師集・一七六)

乱世の沈静に安慰し、建武の中興を寿ぐ歌であるが、これに類した歌は

ただこの場合、留意したいのは「建武千首」の作者には、内裏で一堂に会して探題形式で詠じた歌人と、単に歌題を下賜された歌人の二層があつたらしいことである。

「新千載集」の詞書は、大きく、

①「建武」年内裏にて人々題をさぐりて千首の歌つかうまつりける時」

②「建武」年内裏の千首の歌に題を給はりて詠みて奉りける時」

③「建武」年内裏千首の歌に」

の三つの系列に別れるが、①の詞書を付した歌の作者は直接参加し、②は題を下賜された歌人、③は①②か不明だが、①の歌人と同一の人物もいるので参加した可能性がある。②の作者には、当時、東国にいた尊氏は別格とし、他は、盛徳・国夏・頼阿・兼好・浄弁などがいて、どうやら地下層は歌題を下賜され、内裏への直接参加はなかつたようだ。井上氏はこの点をもみぬかれ、さらに歌題も、殿上人には「花」とか「橘」などの一般題と「春天象」の如き両方が与えられたが、地下層は、すべて「春天象」……「恋雑物」の如き題のみであつたとみておられる^{注12}。確かに歌題を整理してみると、「桜」「薄」「絶恋」といった一般的なものと「春天象」「春地儀」「春動物」といった傾向の歌題（この系列を仮りに「春天象」系の歌題とする）の二系列に別れる。

作者をこの二系列の歌題から見ると、一般題だけの歌人が十六名で一番多く、「春天象」系のみ歌人は十名、両系列にわたるもの四名となる。「春天象」系だけの歌人十名中には、盛徳・頼阿・兼好・国夏・浄弁など、題を下賜された人物が顔を出し、しかもこのうち、頼阿・兼好は、その家集で七首ともに「春天象」系の歌題ばかり詠出している事実は、先の井上氏の推測を裏付ける。ただ、殿上人の作者は、すべて両系列の歌で詠出したかどうかは疑問で、私は、後述する成立背景からみても、一般題だけの歌人もかなりいたと考えている。

ここで、この歌題の問題とからんで注意すべき記事が「増補和歌明題

部類」（上下二冊）にみえるので紹介しておく。この「明題部類」（架蔵本による）は寛政五年の序跋のある江戸期の版本だが、古今の定数歌会などの歌題だけを集めた便利なものである。その千首題のところに、

千首 建武頃内第二度 出題御子左中納言

春 二百首 夏 百首 秋 二百首 冬 百首 恋 二百首 雑 二百首

天象 地儀 植物 動物 雑物 各有之

とみえる。井上氏はさすがにこの記事にも注意され「第二度」とあり、二度行なわれたのであろうか」と問題提起されている。この「明題部類」の記事は、出題が「御子左中納言」即ち為定であることを示して貴重でもあるが、これら一連の記事を信用すれば、確かに、春・夏・秋・冬・恋・雑の合計で千首となり、天象以下の歌題はみだすのである。その点、「第二度」も二度あつたと解せる。

まず歌題について、「春天象」系から調査すると、現存する歌では、動物系だけが、春動物・夏動物・秋動物・冬動物・恋雑物・雑動物とそろってみえる。おそらく、他の天象・地儀・植物・雑物などにも、各々、春・夏・秋・冬・恋・雑（もつとも「雑雑物」はないかもしれぬが）を付したものが三十題ばかりあり、それを数十人に配分して千首歌としたのではなからうか。

一方、一般の歌題をみると、現存のものから判断すると、結題などの長いものはなく、四季題では、花・春駒・五月雨・橘・薄・露・月・拵衣・九月尽・雪・千鳥・水が判明するすべてであるが、ここで注意すべきは、これらすべてが「堀川百首」の歌題と見事に一致することである。これに対し、恋・雑は、後朝恋・逢不遇恋・鶴・河・述懐などは「堀川百首」と一致するが、絶恋・尋恋・寄玉恋・釋教など一致しないものもある。

この調査から推測すると、一般の題の方、特に四季部は「堀川百首」を参照にした歌題、恋・雑はそれに若干別の歌題を追加した程度のもの

じる。重出しているのは、「新葉集」の後醍醐院の三首が「新千載」に、「藤葉集」の淨弁・隆淵の二首が「新拾遺」に、「草庵集」と「兼好法師集」の各一首が「新千載」に各々重出する。合計七首の重出歌となる。現存する資料のなかでも、未見のものにまだ「建武千首」歌を見落しているものもあるが、ともかく、これまでに収拾し得た歌は重出歌七首を差し引くと、七〇首となる。

ところで、先掲した作者中、年令からみて問題となる人物が一人ある。それは「新千載」での「二品法親王尊道」で、彼は応永十年、享年七十二歳で死没しているので、建武二年頃は、わずか五十六歳となり、和歌の詠める年令ではない。井上氏は、この点から不審に思われたのか、前掲著の「建武千首」作者の中で「尊道か慈道」とされている。今日、活字化している『国歌大観』『国歌大系』など、確かに、「二品法親王尊道」となっているが、今、書陵部蔵本の兼右本「新千載集」に当たってみると、「尊道」と読める文字ではなく、「慈道」と読める。従って、井上氏の疑問のように「尊道」は「慈道」の誤写とみるべきであろう。

死没年時の判然としない作者もいるが、他には、はっきり不都合な作者は見当らぬので、まず「建武千首」に参加した人々とみてよい。これらの人物は「建武千首」にかかわった作者の全体ではなく、まだ資料面にあらわれぬ作者が相当いたはずである。それを勘定に入れると、当時の大覚寺派、二条派の錚々たる人物をえりすぐり、上は皇族、公家、それに武士階級、法体歌人にいたる、かなり広範囲の多数の作者が関係をもった、大規模な歌会であったことが鮮明になる。

ここで、便宜のため、作者整理を行い、括弧内に重出歌を除く現存収録歌数を示して列挙しておく(但し、「尊道」を「慈道」に改める)。

後醍醐天皇(5)・二品法親王覚助(1)・二品法親王慈道(2)・中務卿尊良親王(11)・彈正尹邦省親王(2)・入道二品親王尊円(2)・道熙法親王(1)・前大僧正桓守(1)・前権僧正雲雅(2)・権僧正良聖(1)・

後醍醐院大納言典侍(1)・入道前内大臣公秀(1)・前大納言実教(4)・前大納言為世(3)・前大納言覚円(1)・前大納言為定(2)・前中納言公修(1)・権中納言為明(1)・等持院贈左大臣尊氏(2)・藤原盛徳(1)・侍従為親(1)・藤原雅朝(1)・津守国夏(4)・惟宗光吉(1)・惟宗光之(1)・法印淨弁(1)・法印隆淵(1)・法印雲禪(1)・兼好法師(7)・頓阿法師(7)

以上、「建武千首」の断片的資料を収拾し、その歌と歌人を整理してきたが、さらに各歌集の詞書などによって、成立背景を探っておきたい。詞書には、

建武二年内裏千首歌に(風雅・新千載・新葉・草庵ほか)
と、年代と場所だけを記したもののほか、

建武二年内裏にて人々題をさぐりて千首の歌つかうまつりける時

(新千載など)

と、探題詠歌方式の千首歌であったことを記したもの、

建武二年内裏千首の歌に題を給はりて詠みて奉りける時

(新千載など)

建武二年内裏にて千首歌講せられしに題をたまはりてよみてたてまつりし
(兼好法師集)

などのように、歌題を下賜されたとする詞書もあり、すべての歌人が一堂に会して探題歌会を催したわけではないようである。

しかも尊氏の歌の詞書には「建武二年内裏の千首の歌の折しも東に侍りけるに題を給りて詠みて奉りける歌の中に」(新千載)とあり、この点に着目された井上氏は、建武二年前半の尊氏の動向は判然としない面があるが、八月二日には東下している。「東に侍りける」と照合し、この千首もこれ以後に行われたこと、「十月中旬、中院具光が勅使として関東に下るのであるが、それに付して奉ったのであろうか」と推測されているのは重要な指摘である。

三、「建武二年内裏千首」

元弘三年（一二三三）五月、鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇は、やがて京都に還幸し、建武と改元して天皇の政治を復活した。建武の中興である。この新政の建武二年、内裏で千首探題歌が行われたことは「新千載集」その他の家集の詞書から明らかだが、その「建武二年内裏千首」（以下「建武千首」と略称）の原資料は散佚して現存しない。従って、勅撰集や私家集などから和歌を收拾し、歌会の開催時期、参加歌人、詠出方法、歌題などの諸問題を探ってゆかねばならない。

この「建武千首」に対しても、早く斎藤清衛氏や石田吉貞氏の発言があったが、井上宗雄氏がその著『中世歌壇史の研究南北朝期』で二頁ばかりにわたり、博搜を基礎にした、適確な報告をまとめられている。

以下の私の考究も井上氏のものに多くの新見を追加できる事実を探り当てては、単なる資料整理の域をでないが、「草庵集」との撰歌関係を考える前提として、一応、「建武千首」の成立背景を少し詳細にまとめておきたい。

「建武千首」の資料の散在する歌集には、「風雅集」「新千載集」「新拾遺集」の三集、それに準勅撰の「新葉集」。私撰集では「藤葉集」。私家集では「惟宗光吉集」「兼好法師集」「草庵集」などである。「明題和歌全集」などをはじめとする類題歌集にも散在するが、勅撰集の転載にすぎないようだ。

以下、「建武千首」の歌の収録されている歌集ごとに、作者と歌番号を列挙しておく。

○「風雅集」(1首、六六二(為定))

○「新千載集」(40首、二(実教)・八一(為定)・一一〇(覚助)・一二〇(雲雅)・二五一(公秀)・二六九(公修)・三一九(邦省親

王)・三六九(同上)・三九四(後醍醐天皇)・五五六(同上)・五六六(同上)・六二六(尊氏)・九〇三(覚円)・九〇八(尊円)・九二〇(尊道)・九二五(尊円)・九四七(盛徳)・一〇四六(為明)・一〇四七(光之)・一一二二(為世)・一二〇五(実教)・一二二五(為世)・一四二八(実教)・一四六二(為親)・一五四二(実教)・一五七七(後醍醐院大納言典侍)・一六二六(頼阿)・一六五八(雲雅)・一六九九(兼好)・一七八三(尊氏)・一八二六(雅朝)・一八四八(為世)・一八六四(慈道)・一八八六(雲禪)・一九五四(国夏)・二〇〇五(後醍醐天皇)・二〇一八(同上)・二二二八(桓守)・二二八二(道熙)・二三三四(良聖)

○「新拾遺集」(2首、二二〇(淨弁)・二五四(隆淵))
 以上は一応、「国歌大観」の作者と番号に依拠した。「新千載集」に抜群に多く撰歌されているのは、後述するように、「建武千首」の出題者が「新千載集」の撰者為定その人であったことに起因するだろう。

○「新葉集」(17首、五・一三九・一六五・一八四・二五七・二八七・四〇八・六五八・六九八・八六四・九七二(尊良親王)・三二八・三九六・一二四三(後醍醐院)・一八五・四二八・一〇〇九(国夏))

(岩佐正氏校訂、岩波文庫本による)

○「藤葉集」(2首) 淨弁・隆淵(類従本による)

○「惟宗光吉集」(1首、二四二)

○「兼好法師集」(7首、一七〇、一七六)

○「草庵集」(7首、四七・一四六・三四四・五一八・七五〇・一〇六一・一一六七(以上は「私家集大成」の番号))

以上が現存資料中から收拾できた「建武千首」の歌と歌人であるが、実質的にはお互の歌集に重出しているものがあるので、その歌数は少し減

咲はなのかけ見し水はこほらねとちりしくころは雪とみえつ、
（慶運）
のように、散花に対する感慨をもちこんでいる。

このように「花十首」は歌題設定こそないが、多少の例外を除き、大方の傾向として、待花・盛花・尋花・散花の配列が察せられる。これは前もって主催者が指示したところかもしれないが、桜花の歌題配列の一般的な傾向であるので、各人、自然に一致した配列傾向になったとみてよい。

この配列の一般的な傾向を念頭に置き、「花十首」の歌で「草庵集」にみえない二首の、十首中における位置をみると、一首は四番目で、

里はあれぬはるのみ人のたつねきてはなゆへのころしかのふる道（二五四）
もう一首は最後十番目の歌で、

ちりまよふ花さへまれになり行はさそふあらしのよはるとそ見る（二六〇）

である。前者は尋花、後者は散花の歌題にかよう。これを「頓阿法師詠」「草庵集」で、「花十首」の歌と詞書を付しつつ、実際には書陵部本系「花十首」にみえなかつた二首、

つれもなくけふまで人のとはぬかなとしまれなる花のさかりを

都人まつとせしまにやまさとのみちもなきまで花そふりしく

と比較すると、前者は人が花を尋ねにくるかいなかと問題とする点で一五四番と、後者は、散花を詠じて一六〇番に各々通ずる。従つて、この分析からみても、久保田氏の後日のさし替え説の可能性は一段と強くなるだろう。

この二首がさし替え歌とすれば、それを行ったのは歌会のあつた日からそう遠くない日のことであり、頓阿は「頓阿法師詠」「草庵集」の編纂に当つて、二首のさし替えを行った系統の「花十首」の資料に依拠して撰歌したことになる。そう考えると「頓阿法師詠」は「花十首」より六首、「草庵集」は十首全部採歌したことになる。「花十首」の全歌を撰歌したとすれば、それは、若き日の記念すべき歌会資料への頓阿の並々な

らぬ愛着をも示している。

ただ、一つ問題として残るのは、「花十首」で、
山たかみあまきるさくら咲にけりかすみのうへにふれるしら雪（二五一）
とある歌が「頓阿法師詠」で、

山さくらはやさきぬらしあくるよのかすみのうへにふれるしらゆき（三五）

に改作（先にそう推測した）されたとみれば、それより後年に編纂した「草庵集」に、再び初案に復していることである。久保田氏はこのことにも注意をされ「この点はなお考えたい。」と疑問のまま保留されている。確かに不審な点である。ただ、「草庵集」は編纂に際して「頓阿法師詠」をも参考にしていることは確かだが、手元に撰歌の原資料があるものは、再度、それに当り直して撰歌を行っている傾向がある。この「花十首」の撰歌に際しては、「頓阿法師詠」六首に対し、「草庵集」で十首になっていること自体、「花十首」の原資料に今一度当たっていることを示唆している。その際、「花十首」全歌採歌の態度でのぞんだので、かつて「頓阿法師詠」編纂の際に改作した歌には無頓着なまま、十首とも、もとの「花十首」の本文に依拠したので、先のような不審な事実が生じたのではないかと臆測する。「頓阿法師詠」で為世のことを「二条入道大納言」と呼称するのに「草庵集」では「前藤大納言」と別称しているのも、「草庵集」が編纂に際し、「花十首」の歌を「頓阿法師詠」のまま収録したのではないことを示唆する。

「花十首寄書」は正和四年（一一三二）、「頓阿」二十七歳のとき開催された歌会である。それから実に四十四年後に編纂した「草庵集」に十首全部（さし替え歌二首を加入した場合）しかも、ほとんど改作もせず選歌したことになる。この事実は、先述したように、二条派の有力歌人にまじつて詠歌した若き日の「花十首」歌会への頓阿の忘れがたい思いと誉れと愛着の気持を如実に感じさせてくれる。

このうち、一三〇番は「花十首」の一五一番と、一三二番は一五二番、一三三番は一五三番にすべて一致し(即ち「花十首」の最初の三首をその配列順に採歌、しかも「草庵集」との間には、大きな改作はなく、一三二番の「分ゆけは」が「花十首」は「こ、えゆけは」、一三三番で「さかりとそみる」が「花十首」で「さかりとそしる」と相違がある程度。特に後者は他の「草庵集」諸本には「しる」とある本も多いので「大成」本系の誤写とみてよい。

ついで、

東山花十首に

さひしきは花にわする、やとなれとみせはやとのみ人をまたる、 (一五八)

つれもなくけふまで人の間ぬかな年にまれなる花のさかりを (一五九)

さほひめのいかにをればか桜花にほひさへそふにしきなるらん (一六〇)

と三首が一括してみえる。ここでは、一五八と一六〇の両歌が「花十首」の一五六と一五五に各々、本文も一致するが、二首の間にある一五九の歌は一致歌がない。しかし、この「つれもなく」は、先の「頓阿法師詠」の「東山花十首」の一五一番と一致する。

次は一首だけ独立し、

法性寺花の十首に

みやこ人まつせしまに山里のみちもなきまで花そふりしく (二〇三)

があるが、これも「花十首」にみえないもので、「頓阿法師詠」の「東山花十首」の「二五番と一致する。先の「つれもなく」の歌とともに、「花十首」と無関係の歌ではなからう。

最後も三首一括で出てくる。

法性寺花十首に

とまらぬもことはり成やうき世にはさくへき花の色とみえぬは (二二四)

春きてものときき風とおもひしをうつろふ花にかこちつる哉 (二二五)

日にそへてしける青葉にいと、なを散ぬとみゆる山さくら哉 (二二六)

この三首は、「花十首」の、二一四↓一五八、二二五↓一五七、二二六↓一五九と一致し、しかも本文異同もなく問題はない。

以上とりまとめると、「草庵集」は書陵部本系「花十首寄書」から八首を選歌し、本文改作もほとんど行っていないことがわかる。大きく三首ずつ、三つの歌群として配置したのは、盛花、人待つ花、散花という内容的な配慮によるものである。

ところで、ここで当然問題となるのは、「頓阿法師詠」「草庵集」で、詞書からみて「花十首」の歌とされた「みやこ人」と「つれもなく」の両歌が原資料である「花十首」にみあたらずである。この疑問に対して久保田氏は「花十首」にみえぬ両歌は「後日さし替えられた「花十首」中のもとの見做してよいのではないであろうか」と推測されている。この可能性の有無を少し検討してみよう。

先に「花十首」には桜花を素材にして詠じているが、特設した歌題はないと述べた。が、仔細に読んでみると各人ともその十首の配列には、それなりの意を用いていることに気付く。

即ち、最初の二―三首には、待花や盛花を詠み、しかも、冒頭歌などは、

立のほる雲かとそみるふもとよりさきそふ花のけふのよそめは (実教)

待ほとに幾度雲のまかふらんちきらぬはなもいつはりをして (国冬)

しら雲のたなひくかたややまさくらまつ咲はなのこすゑなるらむ (基村)

などのように、桜を雲などに比喻して「長高い」歌が多い。次に続く、

二―三首は、

よるよるはわかふるさとに旅ねしてあくればかへるはなの木の下 (為世)

よしの山はなのした道あと、めて入にし人も春やとはれむ (為藤)

などのように、花と人とのかわりを詠じたものが多い。また、最後の

三―四首は、

一方にふくとも見えすちはなのにはにみたる、春のゆふかせ (為理)

論争を念頭におけば、「花十首」興行の目的の一つが、そのあたりにあった可能性は十分ありうる。

当時、若冠二十七歳だった頼阿が慶運らとともに、早くも為世門の有力歌人に台頭していた事実こそ、頼阿伝にとつては見逃しえない重要なことである。

二、「花十首寄書」と「草庵集」

二条派の長老為世の主権、しかも錚々たるメンバーが一堂に会した「花十首」歌会に参加できたことは、二十七歳の若き頼阿にとつて、終生忘れえない名譽ある出来事であったので、この資料への愛着もそれだけ深かったろう。

この歌会資料が為明の二首を除き、勅撰集の撰歌対象として問題視されなかったのに反し、頼阿は「頼阿法師詠」に四首、「草庵集」には八首も撰歌している事実が、先の推測を如実に物語る。

「頼阿法師詠」「草庵集」との関連も、すでに井上・久保田両氏の簡明な指摘があるが、私なりに整理し直してみる。

まず、延文二年（一三五七）、「新千載集」撰歌資料として自撰したと思われる「頼阿法師詠」には、次の詞書で二首がでてくる。

二条入道大納言家東山にて花十首寄書せられしに

山さくらはやさきぬらしあくるよのかすみのうへにふれるしらゆき（三五）

花のかのさそふ山ちをわけゆけはやへたつ雲にはるかせそ吹（三六）

うち三六は「花十首」の一五二番と本文も全く一致するが、三五は、

山たかみあまきるさくら咲にけりかすみのうへにふれるしら雪（二五）

と下句は一致するものの上句が相違する。久保田氏はこの事実に関し、後日の編纂である「頼阿法師詠」の方が改作と考えられ、歌風的には「花十首」の方が「長高く」、「頼阿法師詠」の方を「平明である」とされた。

私も、両方の歌は下句が全く一致し、しかも共に上句との間に意味上の齟齬がないところからみて、三五は一五一番を改作したものと考ええる。

両歌ともに霞の上に咲きでた桜を雪に比喻する点は共通するが、「花十首」では「山たかみあまきるさくら」と遠く高く眺望するところに比喻の合理性を設定しているのに対し、「頼阿法師詠」は、「あくるよの」とし、一晚のうちに、いつせいに咲いた桜を、一夜のうちに降り積った雪にみまがうところに比喻の合理性を求めている。作品の優劣はともかく、一五一番の「長高さ」だけの歌から、一夜あけて、いつせいに咲いた桜を一夜のうちに降った雪のごとく感じた驚きに改作した意図はわかるような気がする。改作説を支持したい。

次には「東山花十首に」の詞書で次の四首が一括でとくる。

東山花十首に

さほひめのいかにをれはかさくら花にはひさへそふにしきなるらん（五〇）

つれもなくけふまで人のとはぬかなとしにまれなる花のさかりを（五一）

都人まつとせしまにやまさとのみちもなきまで花そふりしく（五二）

とまらぬもことほりなりやうきよにはさくへきはなの色とみえねは（五三）

このうち、五〇と五三の二首が「花十首」の一五五、一五八と本文異同も全くなく一致するが、五一、五二の二首はみえない。「東山花十首」の詞書は普通なら四首全体（特に、この場合は、五一、五二は間にはさまれている）にかかるとみてよいので、一致歌がないのは不審である。この疑問に対しては、後に臆測を述べる。

「草庵集」では、まず春歌下に、次の詞書のもとで三首が一括して出てくる。

前藤大納言、法性寺花下にて講せられし歌十首に

山たかみあまきる桜さきにけり霞のうへにふれるしら雪（一一〇）

花のかのさそふ山路を分ゆけは八重たつ雲に春風そ吹（一一一）

あふ人のなきに付ても山さくらいへちわする、さかりとそみる（一一三）

「寺三品」と呼んでいることからみても、(先の冒頭の作者表記は詠歌時の官位記載なることも前提)、誤認であり、奥付の正和四年三月五日とみてよい。

ここで今一つ注意されるのは、書陵部本系の祖本の「花十首」を書きとめていた人物であるが、私はそれを為明その人ではないかと推測する。

冒頭の官位記載をみると、為世、頓覚(公雄)実教などに「殿」と敬称する一方、正和四年三月当時、春宮亮正四位下の隆長や左少将従四位上の具行に「朝臣」を付している。しかるに当時、従四位下であった為明には「朝臣」の敬称が付されてよいのに、それが無いのは、この歌会の懐紙をまとめて書写し、冒頭に各作者をまとめた、いわゆる書陵部本系の祖本の筆者が為明その人であることを示唆しているとみたいが、いかがであろう。「花十首」一七〇首のうち、代々の勅撰集に撰歌されたのが、為明の二首だけであることも、なにかこの事実と関連をもつように思えてならない。

「花十首」に参加した作者十七名に関しては、すでに久保田氏の解説に詳細なので、それに譲り、ここでは、十七名がいずれも二条派系列の歌人であること、為世、為藤、為明などの御子左家の専門歌人から淨弁、頓阿、慶運などの法体歌人にいたるまで、廷臣、武士、僧侶をまじえた、かなり広範囲の階層にわたっていること、および、ほとんどが「草庵集」「統草庵集」「井蛙抄」などの頓阿の著作作品に顔を出す人達であったことだけを申しそえたい。

「花十首」から勅撰集に撰歌されたのは、意外と少なく、先述のように為明の二首だけである。

前大納言為世人々いざなひて法性寺に花見に罷りて十首

の歌よみ侍りける中に

参議為明

足引の遠山ざくらさきぬらしかすみてかゝる嶺のしら雲

(新千載集・春上・八〇)

前大納言為世人々いざなひて法性寺に花見に罷りて十首

の歌よみ侍りける中に

民部卿為明

家苞に折りつる花もいたづらにかへさ忘る、山ざくら哉

(新拾遺集・春下・一三八)

この二首は為明の「花十首」の八二と八七と一致し、本文異同も一箇所もない。また「新千載」「新拾遺」の詞書の記し方が全く同一なのは、両勅撰集が同じ資料に依拠したことを暗示する。

この詞書によると「花十首」を主催したのは、当時、民部卿前権大納言であった為世(六十六歳)ということになるが、このことは、「草庵集」の「前藤大納言、法性寺花下にて講せられし歌十首」からみても確實である。

以上のように「花十首寄書」は、正和四年三月五日の花盛りの頃、長老為世が十七名の二条派の錚々たる廷臣・武士・法体歌人を勧誘し、東林寺から法性寺近辺で、桜花を詠みこんだ十首歌を各歌人に詠出させた歌会であることが明らかとなった。

各十首歌は原則として桜花が詠みこまれているが、特に歌題は設定していない。これに類したものは、顯季が七条亭で主催し、俊頼、長実、仲実などが参加した「桜花十首」がある。と久保田氏は指摘している。

正和年間といえ、正和元年三月に、為兼が「玉葉集」を奏覧したことも象徴されるように、京極派の全盛時代であり、二条一門は沈淪の時期であった。「玉葉集」を批判した「歌苑速署事書」が公表されたのは、その奥付によると「正和四年八月日」である。このような当時の歌壇状況を察して斎藤氏は「亀岡の東林寺前に於ける花下歌會の如きも、二條家歌風の宣傳として行はれたものかの様にすら解釈され、十七名の主要歌人を網羅している」とされ、石田氏もこの歌会を、二条派の結束を固くさせたものとみとられていたが、延慶年間から続く為世、為兼らの

いる。上冊の中途に

此一冊以或類聚本連々書写之

當百首等在之予所持分略之

于時天正十五年六月廿九日加表

紙之次記之訖 閑人中心子

とあり、また、下冊は主として室町時代の作品集成である。下冊奥書に

右二卷西洞院右衛門督時直卿

以自筆書写之旨

元和九五年五月十七日 左近羽林藤原判

とあり、本書の書写伝来を示す。

久保田氏の解説には両本を比較しての言及は特になされてないが、私に兩本文を対校してみると、互に一首の歌の出入りもなく、作者表記、奥付など全く異同なく、明らかに同系統の伝本とみてよい。本文では一七〇首中、わずかに四〜五箇所、それも一字程度の異文が散見される程度なので、ここでは書陵部本を底本にした、未刊国文資料に全面的に依拠する(但し、四〜五箇所異文のなかには、高松宮本の方が妥当と思えるものもあることを付言しておく)。

「花十首」の末尾には、

花十首和歌寄書

龜岡東林寺前花下会

正和四年三月五日也

同十一月十日書写之

とあり、成立背景が示唆されている。井上、久保田両氏も、官位記載に矛盾がないので、正和四年(一一三二)三月五日に催されたものとみて間違いないとされる。また、久保田氏は、「新千載集」「新拾遺集」に採歌された為明の「花十首」の詞書が「前大納言為世人々いざなひて法性寺に花見に罷りて十首の歌よみ侍りける中に」とか「草庵集」の「花十

首」の歌に「法性寺十首」などあり、一見、奥付の東林寺と矛盾するようだが、地理的にみると両寺は近接しているので、「東林寺前」といっても「法性寺」といってもさしつかえないこと、要するに東福寺附近ということだとされている。

ところで、「花十首」の冒頭には「作者十七人」として次の歌人名を列挙してあるが、それに続く「詠花十首和歌」の各作品前の作者表記とは必ずしも一致しないので、この方を括弧内に記しておく。

民部卿殿(民部卿為世)、中納言入道殿(頓覚、富小路大納言殿(実教)、三条相公(実任)、宰相中将(為藤、法性寺三品(為理)、隆長朝臣(春宮亮隆長)、具行朝臣(左少将具行)、為明(為明)、幸鶴(幸鶴為冬、国冬(撰津守国冬)、基任(散位基任)、基村(基村)、長舜法印(法印長舜)、
淨弁(淨弁、頓阿(頓阿、慶運(慶運)

冒頭の作者表記と各作品前の作者表記に相違があるのは、おそらく括弧内のものが、歌会で作者自身が懐紙に自署したものであり、民部卿為世、春宮亮隆長、左少将具行、撰津守国冬など、まさしく正和四年三月当時の官職を示している。これに対して、冒頭の作者表記は、ある人物が、その詠作当時の官位記載でか、あるいは、後の書写段階で一括して記したものであろう。この点からだけみると、冒頭の官位記載が、そのまま詠作時(正和五年三月五日)の官位記載を示しているとの保障はないわけだが、正和四年七月二十一日に民部卿を辞している為世のことを、冒頭でも「民部卿殿」とし、作品前の自署「民部卿為世」と一致するので、冒頭の作者の官位記載も、どうやら「花十首」詠作時のもので、それを某人が一括して記しとどめたものとみてよい。

因に、石田吉貞氏は「頓阿・慶運」で「花十首」の歌会を正和二年とされ(卷末年譜も同様)、「和歌文学大辞典」(明治書院)の付載年表でも正和二年三月五日に「龜岡東林寺二条派歌会(草庵)」とするが、すでに久保田氏指摘のごとく、正和三年十月二十一日に従三位になった為理を「法性

「草庵集」の撰歌資料考(二)

——「花十首寄書」と「建武二年内裏千首」——

稲田利徳

はじめに

前稿^{注1}は「草庵集」の撰歌資料の考察として、「聖護院五十首」をとりあげたが、本稿はそれに続くものである。

撰歌資料の考究の意義や目的に関しては、すでに前稿で述べたので、ここでは省略する。今回、対象とするものは「花十首寄書」と「建武二年内裏千首」であるが、ともに正和期、建武期の二条派歌壇における頓阿の活躍を示す和歌資料である。前者は、その歌会の全貌を示す資料が現存するが、後者は全作品が残らず、撰集類からの断片的な資料收拾によつて、およその背景を知るほかはない。その点、考察方法は異なるが、「草庵集」編纂に際して、共に重視した資料と考えられるので、ここで一括して処理したい。

一、「花十首寄書」

「花十首寄書」(以下「花十首」と略称)とは、為世など十七名が東林寺前の花の下で、桜花に取材した歌を、各人十首ずつ詠じたもので、書陵部蔵本の題簽(奥付)による仮称作品である。

この作品に対しては、戦前、斎藤清衛氏^{注2}や石田吉貞氏^{注3}が一言触れて注意されていたが、その後、井上宗雄氏^{注4}のかなり詳しい紹介があった後、昭和四十一年に久保田淳氏により「頓阿法師詠と研究」(未刊國文資料)に翻刻され、同時に詳細な解説も加えられた。

従つて「花十首」の諸本や成立、作者、内容など、ほとんど久保田氏の解説につくされているのであるが、「草庵集」の撰歌との関連を述べる前提として、重複する面も多いが、簡単に紹介し、さらに私見をも加えておきたい(詳しくは、なお、久保田氏の解説を参照せられたい)。

「花十首」の諸本は現在、わずかに二本だけ知られている。一本は宮内庁書陵部本で、表紙は、縦二三・六厘、横一七・五厘。布目鳥の子の本文料紙を二折に綴じた綴葉装の写本一冊。綴り表紙で左肩に鳥の子紙で「花十首寄書」と題簽を貼付してある。一面十行で歌は二行書。墨付二〇枚、巻頭、巻末に各遊紙一枚を付す。江戸初期の書写になると思われる。

もう一本は高松宮家に所蔵されているもので、独立冊子でなく、「百首」(上下二冊)の上冊に収録されているもの。私は実物を見てなくて写真版を所持しているが、久保田氏の解説によると袋綴写本二冊で表紙は内疊り、江戸時代初期の書写とのこと。上冊には「遠嶋百首」「順徳院百首」などとともに「詠花十首和歌」と稱して、この「花十首」が収録されて